

伊藤祐二（作曲家）

ユージ 芹に  
気をつける

本誌の読者諸氏は、この音楽をどう聴かれるだろうか。

ペーター・アブリンガー「声とピアノ」

Peter Ablinger "Voices and Piano"

(CD) Mark Knopf, piano Subrosa SR 382

「声とピアノ」は、作曲途上にある曲集で、全八十曲になる予定。一曲ごとに、有名人のスピーチ、インタビュアー等の録音が用いられ、ウェブ上に、アポリネール、デュシャン、パゾリーニ、ビリーホリデイ、原節子、等、第一集六十名の名が挙がっている。

([https://ablinger.mur.at/voices\\_and\\_piano.html](https://ablinger.mur.at/voices_and_piano.html) 他のCD情報もあり。)

夫々、録音の音声を連続的に音響分析し、それをピアノの楽譜に落とし込んでいくように。 (余剰の音も書かれているが。)

ステージでは、スピーカーから声の録音が流れ、それを正確にピアノがなぞっていく。スピーチの持っている抑揚、リズム、音程が、ピアノに引き出され、音楽となり、スピーチと混然一体となって

聴こえる。聞こえる。言葉に音楽が付されるのではなく、音楽は、言葉（語り）と音響的に一体化し、同時に、個々の話者の話、声の個性、存在感、（いや、声のきめ、と言わばきか）を豊かに伴いつつ、その目眩いばかりの相互補完の様相が実に魅力的。（ステージでは時に、話者の写真が提示される。）

（尤も、作曲者をよく知る私の友人（作曲家）は、この曲と、神秘性をまとうアブリンガーのやり方に、ある作品が人気を得るためのクリシェを見出しているけれど。）(Youtube上にも演奏動画あり。)

松平頼則・松平頼暁ピアノ作品集

井上郷子、ピアノ AICD-133

このCDは、三十年以上、この両作曲家と個人的交流を深め、作品を弾き続けてきた井上郷子が一昨年、両氏の作品によるリサイトをを行い、昨年、改めて録音したものである。（二曲を除き、すべて初録音）

松平頼則（一九〇七—二〇〇一）、松平頼暁（一九三二—）は、この父子をもつて二十世紀初頭から今日まで、日本の近代、現代音楽を強力に牽引してきたことは誰もが知る。

頼則作品は日本の伝統音楽をその核心に持つ作品が多いが、彼の地でのオリエ

ンタリズムに擦り寄って人気を博すような作曲家とは厳に一線を画す。このCDでも、雅楽の旋法名を表題に持つ（井上に贈られた）作品があるが、音列としての音が広い音域に鋭く散乱する厳しい音楽である。それでもそこに、雅楽の「何か」を確かに感じさせる不思議な魅力がある。

'18年に遺稿が新発見された「短歌のため」は合わせ鏡になった美しい二曲。頼則作品の持つ独特な魅力と語ることの難しさについては、本誌第5号に書いたところである。ここに収録された三曲は、いずれも井上の委嘱によって'97、'07、'19年に作曲されたものだが、システマティックな作曲技術と、厳しくも、多様で、豊かで諧謔的で、美しい、音楽の綾。語ることの難しい、複雑な奥行きのある音楽。

'19年に井上の委嘱で作曲された「ピアノのための三章」は、前年に亡くなられたご令嬢の為に書かれた。リサイト最後の一曲として井上が演奏し、その終演後聴衆がホワイエに出る中で、私は何人もの方が涙されているのを見た。システマティックに書かれた「現代音楽」が人を深く動かし、涙せしめたのだ。私は驚き、理解し、確信した。